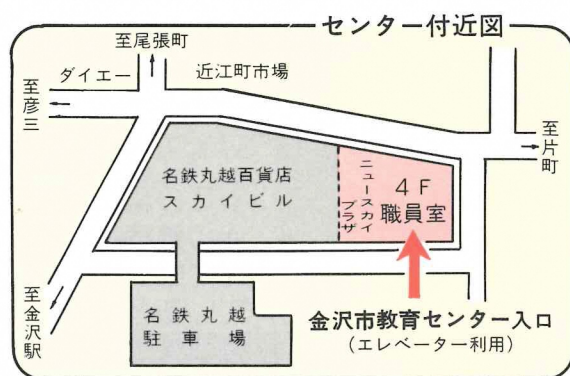


登校拒否に関する参考図書^{の例}

- ① 小野 修著
親と教師が助ける
登校拒否児の成長
黎明書房
- ② 河合 洋著
学校に背を向ける子ども
NHKブックス
- ③ 東山 紘久著
母親と教師がなおす 登校拒否
創元社
- ④ 神保 信一、山崎 久美子著
学校へ行けない子どもたち
現代のエスプリ
至文堂
- ⑤ 西條 隆繁著
登校拒否
誤解と偏見からの脱出
高文研

金沢市教育センターの案内図

所在地 〒920 金沢市武蔵町14番31号
(ニュースカイビル内)
電話 21-1642



*当センターには専用駐車場がありませんので、近くの
パーキングをご利用下さい

なお、登校拒否についての詳細は金沢市教育センターへお問い合わせください。

(表紙写真：市内中学生の登校風景)

保護者の理解のために

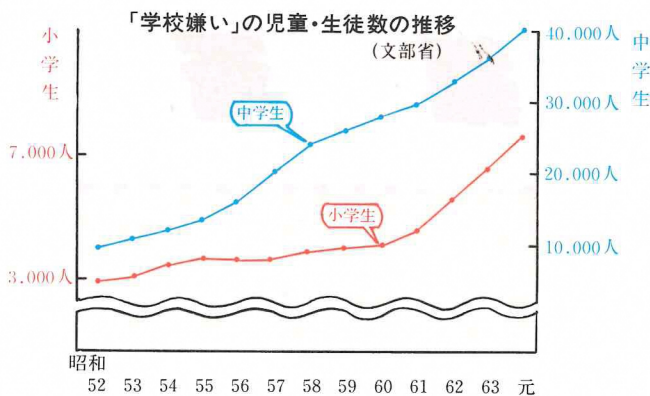
登校拒否



金沢市教育センター

登校拒否とは

① 増え続ける登校拒否



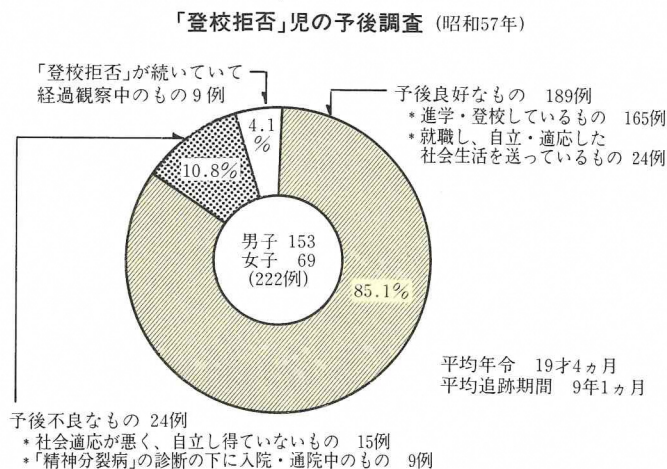
登校拒否は小学生、中学生を問わず増加の一途をたどっています。しかも、この調査は欠席が年間50日以上の子どもについて調べたものであり、調査の基準を下げたとき、さらに数倍に増えそうです。登校拒否は今やどの子どもにも起こりうる問題になりつつあるのです。

② 多様化する原因

もし、子どもが登校拒否に陥ったとき、私たちは往々にして「なぜ」「どうして」を連発し原因を探ろうとします。しかし、多くの場合様々な要因が複雑に絡み合っており原因を見つけることが難しいといえます。「原因の追求」は「子どもが悪い」「親が悪い」「教師が悪い」式の「責任の追求」にすり替えられることが多く、肝心な子ども自身の援助にマイナスの影響を与えかねません。いじめのようにはっきりした原因が認められる場合を除き、原因の追求に目を奪われることを避け、まず子ども自身の苦しみや悲しみに焦点を当て、共感と理解を深めていくことが大切なのです。

③ 多くの子どもが立ち直る

登校拒否の問題で苦しみ悩んでいた子どもたちがその後どうなっていたのでしょうか。例えば右図のように、多くの調査結果で、約8割前後の子どもが社会的に自立しているのです。登校拒否の多くは“心の病気や障害”ではなく、子どもが自立していく過程で出会い、しかも乗り越えていくことが十分可能な“心の危機”なのです。



(「学校に背を向ける子ども」NHKブックス P163)

登校拒否になったら

① 登校拒否のタイプ

登校拒否といっても様々なタイプがあります。ここでは代表的な二つの対照的タイプについて述べます。

	神経症傾向	怠学傾向
性格	<ul style="list-style-type: none"> ○ 几帳面で完全癖の傾向 ○ 感受性が強く神経質 ○ 心配性、不安傾向が強い ○ 自己主張があまり見られない 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自己中心的、他罰的で、学校や社会から逸脱する傾向がある または ○ 未熟、回避的で、無気力・無関心な傾向が強い
様子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家に閉じこもり、外に出ようとせず、対人接触を避ける ○ 昼夜逆転するなど、一見怠惰な生活を送る ○ 登校しないことへの不安や罪悪感を強くもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 外出することに抵抗はなく、友だちとの交流も多い ○ 気ままで、落ち着きのない生活を送る ○ 不安や罪悪感はありません、ときどき登校することもある
身体	<ul style="list-style-type: none"> ○ 頭痛、発熱、腹痛、吐き気等の身体症状を訴えることが多い 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 心理的葛藤は少なく、身体症状はあまりみられない

(なお、狭い意味で登校拒否と呼ぶとき、神経症傾向のタイプを指します。このタイプが登校拒否の中核群と考えられています。)

② かかわり方のねらい

・・・神経症傾向・・・

このタイプの子どもたちは、心の葛藤による強い緊張状態にあります。従って、できるだけ登校を強制せず、十分に休息を与え、心の緊張を解きほぐす必要があります。そのためには、子どもたちの気持ちをあるがままに受け入れ、彼らが自分自身の気持ちを本音で自由に表現できるようにかかわることが大切です。

・・・怠学傾向・・・

このタイプの子どもたちは、通常心の葛藤は少なく、一見無気力にみえても、本来高いエネルギーを秘めているといえます。従って、少々の困難にへこたれない前向きで積極的な気持ちを持たせる必要があります。そのためには、子どもたちが希望を抱き、意欲的に取り組む目標を持つようにかかわっていくことが肝要です。

③ 日々のかかわり

【イ】登校を無理強いしない

登校拒否の子どもは、心の中に苦しみや悩みを強く持っています。それにもかかわらず登校を強制することは、さらに苦痛を与えるのみで、問題の解決に向かって、子どもが自ら動き出すことの妨げにしかありません。大切なことは、登校することを一時棚上げしても、子どもの気持ちになって、自立への動きを“待つ勇気”を持つことです。

【ロ】無理に生活の規則を守らせない

「学校へ行かないのだから、せめて家では規則正しい生活をさせたい」と多くの親が望みます。しかし、登校拒否の子どもたちの多くは怠惰な生活になっているようです。このため、親と子どもの間で、対立が深刻になって行くこともよくあります。生活の規則を守らせるよりも、その子どもの心情を理解し、温かく見守る中で、子どもの“心の安定”をはかることがもつとも大切なことなのです。

【ハ】子どもと共に歩む

登校拒否が長期にわたる場合、将来に対する不安や学力の低下、交友関係からの孤立など、学校や社会から取り残されていくわが子のことが心配で、何とか早く登校させたいと焦るのが親心です。また、親戚や知人の、親の育て方への批判も焦りや不安を増します。

しかし、外からの批判に心を奪われることなく子どもの心情を理解し、気持ちを受けとめましょう。そして、“子どもと共に歩んでいく”親の姿勢こそが、登校拒否を克服していく原動力になるのです。

【ニ】子どもに合った生き方をみつける

心が安定したとき、子どもに合った生き方や目標について話し合うことが大切です。

その場合、子どもに合った生き方や目標が、必ずしも学校へ戻ることに繋がらないかもしれません。実際、学校に戻れないままに、自分なりに道を選び、自立していった子どもたちも多くいます。

いずれにせよ子どもが自分に合った生き方や目標を見つけ、新しい一歩を踏み出すとき、真の自立への道が開かれてくるのです。

④ 「そだち」でのかかわり

登校拒否の子どものための金沢市教育センター適応指導教室「そだち」も、親と共に登校拒否の問題について考えています。子どもの実態に応じ「そだち」では以下のような援助をしています。

- ◆子どもたちが自由と安全を実感できる居場所づくり
- ◆学習や進路などについて具体的、個別的援助
- ◆小集団での交流や活動
- ◆学校復帰への環境づくり

登校拒否かなと思ったら

① 登校拒否のサイン

もし子どもに下の表のような状態がみられたら、まず学級担任に相談することをお勧めします。その中で子どもが学校へ行きたがらなくなってきた背景を担任と共に考え対策をたてます。

1. 登校時間帯は、ぐずぐずしてなかなか起きない。
2. 朝になると、頭痛や腹痛を訴える。
3. 登校時間帯になると、いろいろな理由で落ち着きがなくなる。
4. 学校を休んでいても、学校のことを常に気にしている。
5. 休日や放課後になると、元気になる。
6. 全般に不安や緊張が強くなり、落ち着きがなくなる。

② 登校拒否に関する主な相談機関

適当な手だてがみつからないときには、以下の相談機関を利用したらいかがでしょうか。

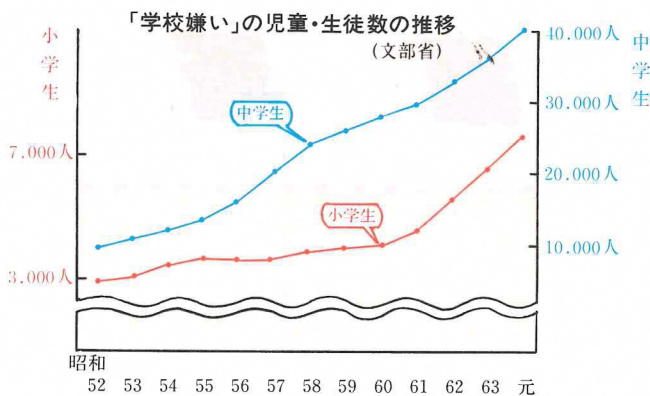
金沢市教育センター (金沢市武蔵町14-31) 21-1642	市内の児童生徒の問題行動などについて、学校からの依頼による相談。登校拒否児のために適応指導教室「そだち」を設けて指導・援助。
石川県教育センター (金沢市高尾町ウ31-1) 98-3515	県内の幼児から高校生までの教育的諸問題について解決に援助、協力している。登校拒否の高校生などのためにグループ合宿等を実施。
石川県中央児童相談所 (金沢市本多町13-1-10) 23-9553	18才未満の児童に関する問題についての相談。一時保護や福祉施設への入所も。登校拒否児の適応をめざし、「ぐるーぷ」をつくって指導。
石川県精神保健センター (金沢市南新保町ル3-1) 38-5761	幼児から老人まで、広く心の問題に関し、医師や心理判定員が相談。
国立療養所医王病院 (金沢市岩出町二の73) 58-1180	ネフローゼ、喘息等入院治療を中心にした病院。登校拒否など心理的な治療を要する相談・入院が増加。隣接する県立医王養護学校で学習。

以上の機関の他に

石川県文教会館相談室 62-5760 金沢総合健康センター 22-0102
金沢大学附属病院 62-8151 石川県立中央病院 37-8211
などがあります。

登校拒否とは

① 増え続ける登校拒否



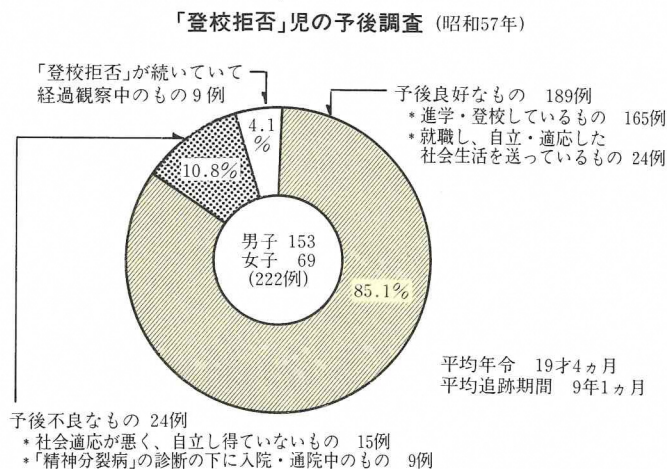
登校拒否は小学生、中学生を問わず増加の一途をたどっています。しかも、この調査は欠席が年間50日以上の子どもについて調べたものであり、調査の基準を下げたとき、さらに数倍に増えそうです。登校拒否は今やどの子どもにも起こりうる問題になりつつあるのです。

② 多様化する原因

もし、子どもが登校拒否に陥ったとき、私たちは往々にして「なぜ」「どうして」を連発し原因を探ろうとします。しかし、多くの場合様々な要因が複雑に絡み合っており原因を見つけることが難しいといえます。「原因の追求」は「子どもが悪い」「親が悪い」「教師が悪い」式の「責任の追求」にすり替えられることが多く、肝心な子ども自身の援助にマイナスの影響を与えかねません。いじめのようにはっきりした原因が認められる場合を除き、原因の追求に目を奪われることを避け、まず子ども自身の苦しみや悲しみに焦点を当て、共感と理解を深めていくことが大切なのです。

③ 多くの子どもが立ち直る

登校拒否の問題で苦しみ悩んでいた子どもたちがその後どうなっていたのでしょうか。例えば右図のように、多くの調査結果で、約8割前後の子どもが社会的に自立しているのです。登校拒否の多くは“心の病気や障害”ではなく、子どもが自立していく過程で出会い、しかも乗り越えていくことが十分可能な“心の危機”なのです。



(「学校に背を向ける子ども」NHKブックス P163)

登校拒否になったら

① 登校拒否のタイプ

登校拒否といっても様々なタイプがあります。ここでは代表的な二つの対照的タイプについて述べます。

	神経症傾向	怠学傾向
性格	<ul style="list-style-type: none"> ○几帳面で完全癖の傾向 ○感受性が強く神経質 ○心配性、不安傾向が強い ○自己主張があまり見られない 	<ul style="list-style-type: none"> ○自己中心的、他罰的で、学校や社会から逸脱する傾向がある または ○未熟、回避的で、無気力・無関心な傾向が強い
様子	<ul style="list-style-type: none"> ○家に閉じこもり、外に出ようとせず、対人接触を避ける ○昼夜逆転するなど、一見怠惰な生活を送る ○登校しないことへの不安や罪悪感を強くもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ○外出することに抵抗はなく、友だちとの交流も多い ○気ままで、落ち着きのない生活を送る ○不安や罪悪感はありません、ときどき登校することもある
身体	<ul style="list-style-type: none"> ○頭痛、発熱、腹痛、吐き気等の身体症状を訴えることが多い 	<ul style="list-style-type: none"> ○心理的葛藤は少なく、身体症状はあまりみられない

(なお、狭い意味で登校拒否と呼ぶとき、神経症傾向のタイプを指します。このタイプが登校拒否の中核群と考えられています。)

② かかわり方のねらい

・・・神経症傾向・・・

このタイプの子どもたちは、心の葛藤による強い緊張状態にあります。従って、できるだけ登校を強制せず、十分に休息を与え、心の緊張を解きほぐす必要があります。そのためには、子どもたちの気持ちをあるがままに受け入れ、彼らが自分自身の気持ちを本音で自由に表現できるようにかかわることが大切です。

・・・怠学傾向・・・

このタイプの子どもたちは、通常心の葛藤は少なく、一見無気力にみえても、本来高いエネルギーを秘めているといえます。従って、少々の困難にへこたれない前向きで積極的な気持ちを持たせる必要があります。そのためには、子どもたちが希望を抱き、意欲的に取り組む目標を持つようにかかわっていくことが肝要です。

③ 日々のかかわり

【イ】登校を無理強いしない

登校拒否の子どもは、心の中に苦しみや悩みを強く持っています。それにもかかわらず登校を強制することは、さらに苦痛を与えるのみで、問題の解決に向かって、子どもが自ら動き出すことの妨げにしかありません。大切なことは、登校することを一時棚上げしても、子どもの気持ちになって、自立への動きを“待つ勇気”を持つことです。

【ロ】無理に生活の規則を守らせない

「学校へ行かないのだから、せめて家では規則正しい生活をさせたい」と多くの親が望みます。しかし、登校拒否の子どもたちの多くは怠惰な生活になっているようです。このため、親と子どもの間で、対立が深刻になって行くこともよくあります。生活の規則を守らせるよりも、その子どもの心情を理解し、温かく見守る中で、子どもの“心の安定”をはかることがもつとも大切なことなのです。

【ハ】子どもと共に歩む

登校拒否が長期にわたる場合、将来に対する不安や学力の低下、交友関係からの孤立など、学校や社会から取り残されていくわが子のことが心配で、何とか早く登校させたいと焦るのが親心です。また、親戚や知人の、親の育て方への批判も焦りや不安を増します。

しかし、外からの批判に心を奪われることなく子どもの心情を理解し、気持ちを受けとめましょう。そして、“子どもと共に歩んでいく”親の姿勢こそが、登校拒否を克服していく原動力になるのです。

【ニ】子どもに合った生き方をみつける

心が安定したとき、子どもに合った生き方や目標について話し合うことが大切です。

その場合、子どもに合った生き方や目標が、必ずしも学校へ戻ることに繋がらないかもしれません。実際、学校に戻れないままに、自分なりに道を選び、自立していった子どもたちも多くいます。

いずれにせよ子どもが自分に合った生き方や目標を見つけ、新しい一歩を踏み出すとき、真の自立への道が開かれてくるのです。

④ 「そだち」でのかかわり

登校拒否の子どものための金沢市教育センター適応指導教室「そだち」も、親と共に登校拒否の問題について考えています。子どもの実態に応じ「そだち」では以下のような援助をしています。

- ◆子どもたちが自由と安全を実感できる居場所づくり
- ◆学習や進路などについて具体的、個別的援助
- ◆小集団での交流や活動
- ◆学校復帰への環境づくり

登校拒否かなと思ったら

① 登校拒否のサイン

もし子どもに下の表のような状態がみられたら、まず学級担任に相談することをお勧めします。その中で子どもが学校へ行きたがらなくなってきた背景を担任と共に考え対策をたてます。

1. 登校時間帯は、ぐずぐずしてなかなか起きない。
2. 朝になると、頭痛や腹痛を訴える。
3. 登校時間帯になると、いろいろな理由で落ち着きがなくなる。
4. 学校を休んでいても、学校のことを常に気にしている。
5. 休日や放課後になると、元気になる。
6. 全般に不安や緊張が強くなり、落ち着きがなくなる。

② 登校拒否に関する主な相談機関

適当な手だてがみつからないときには、以下の相談機関を利用したらいかがでしょうか。

金沢市教育センター (金沢市武蔵町14-31) 21-1642	市内の児童生徒の問題行動などについて、学校からの依頼による相談。登校拒否児のために適応指導教室「そだち」を設けて指導・援助。
石川県教育センター (金沢市高尾町ウ31-1) 98-3515	県内の幼児から高校生までの教育的諸問題について解決に援助、協力している。登校拒否の高校生などのためにグループ合宿等を実施。
石川県中央児童相談所 (金沢市本多町13-1-10) 23-9553	18才未満の児童に関する問題についての相談。一時保護や福祉施設への入所も。登校拒否児の適応をめざし、「ぐるーぷ」をつくって指導。
石川県精神保健センター (金沢市南新保町ル3-1) 38-5761	幼児から老人まで、広く心の問題に関し、医師や心理判定員が相談。
国立療養所医王病院 (金沢市岩出町二の73) 58-1180	ネフローゼ、喘息等入院治療を中心にした病院。登校拒否など心理的な治療を要する相談・入院が増加。隣接する県立医王養護学校で学習。

以上の機関の他に

石川県文教会館相談室 62-5760 金沢総合健康センター 22-0102
金沢大学附属病院 62-8151 石川県立中央病院 37-8211
などがあります。